

2020年度 本州太平洋におけるサケ回帰状況 (第2報：1月31日現在)

国立研究開発法人水産研究・教育機構

本州太平洋側のサケ来遊数について、1月31日現在の状況をお知らせします（最終報）。

1. サケ来遊概況

1月31日現在の本州太平洋側（竜飛岬から東の青森県～茨城県）におけるサケ来遊数（沿岸漁獲数と河川捕獲数の合計）の累計値は118万尾（前年同期：70%）と前年を大きく下回り、平年同期（1989～2019年の平均値、1286万尾）との比較では9%という状況であり、1989年以降で最も少なくなっています（図1）。

河川捕獲数の累計値は17万尾（前年同期：82%）と前年を下回り、平年同期（121万尾）との比較では14%となっています。

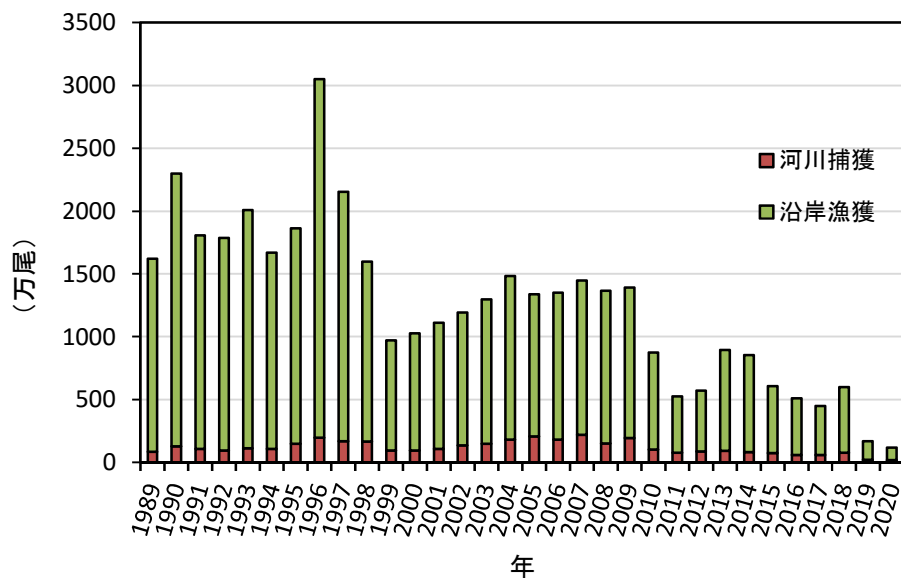


図1 1月31日時点の本州太平洋側におけるサケ来遊数（累計値）の経年変化

2. 年齢別河川捕獲数

本州太平洋側の主要河川のうち、年齢が判明している12河川（図2左）について、年齢割合に河川捕獲数を乗じて、過去10年間で比較しました。

青森県

2020年の4年魚の捕獲数は、いずれの河川においても前年を上回っているものの、過去10年間では川内川で4番目、奥入瀬川及び新井田川では2番目に少なくなっています。3年魚は川内川で平均的な値となっているほかは、奥入瀬川で2番目、新井田川で3番目に少なくなっています。5年魚はいずれの河川も過去10年間で最も少なくなっています。その結果、捕獲数全体としては、川内川では2番目に少なく、奥入瀬川及び新井田川では最も少なくなっています（図2右）。

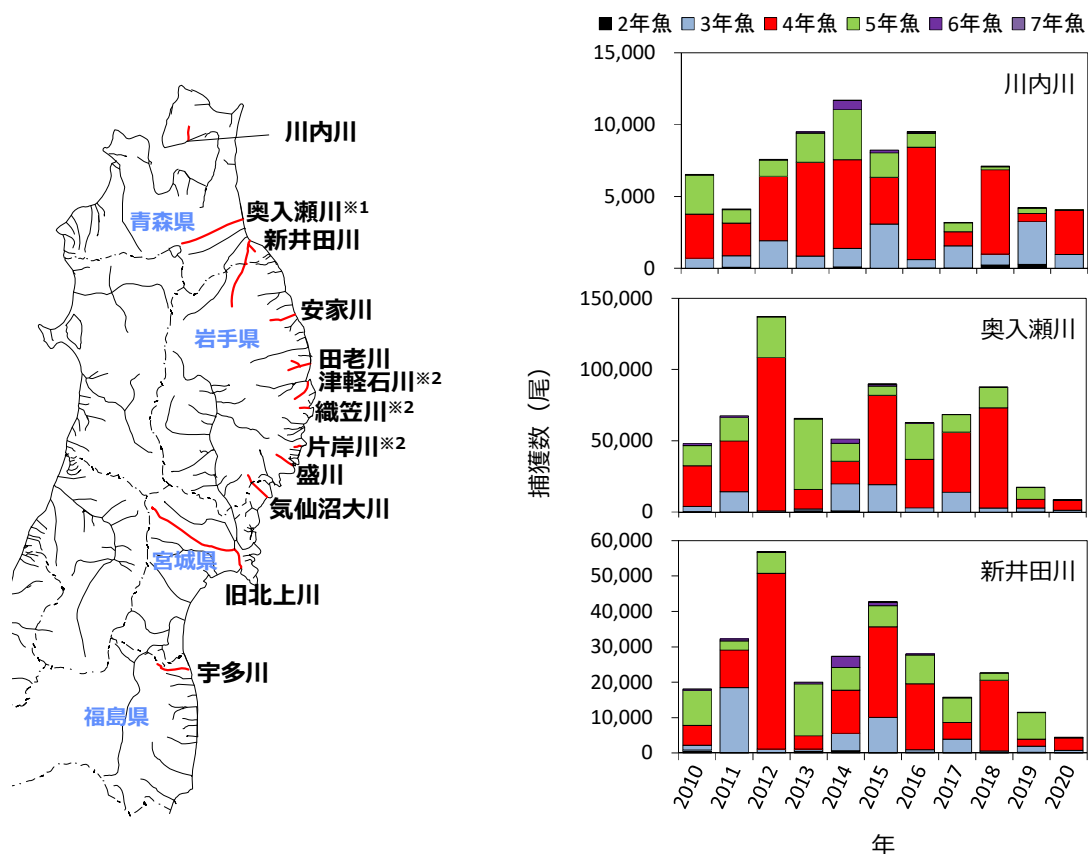


図2 調査河川（左）と青森県調査河川の年齢別河川捕獲数（右：全て1月31日現在までの累計値）

※1：地方独立行政法人青森県産業技術センターのデータ
 ※2：岩手県水産技術センターのデータ

岩手県

2020年の4年魚（2016年級）の捕獲数は、2016年級の放流数が台風被害により例年の約10分の1以下に減少した安家川においては、過去10年間で最も少なくなりました。それ以外の河川では前年を上回ったものの、田老川で2番目、津軽石川、織笠川、片岸川で3番目、盛川で4番目に少なくなっています。3年魚は安家川及び織笠川で過去10年間の平均的な値となっている一方、片岸川では最も少なく、田老川及び盛川で2番目、津軽石川で3番目に少なくなっています。5年魚はいずれの河川も過去10年間で最も少ない状況です。その結果、捕獲数全体としては、安家川、田老川、片岸川で最も少なく、津軽石川、織笠川、盛川で2番目に少ない状況となっています（図3）。

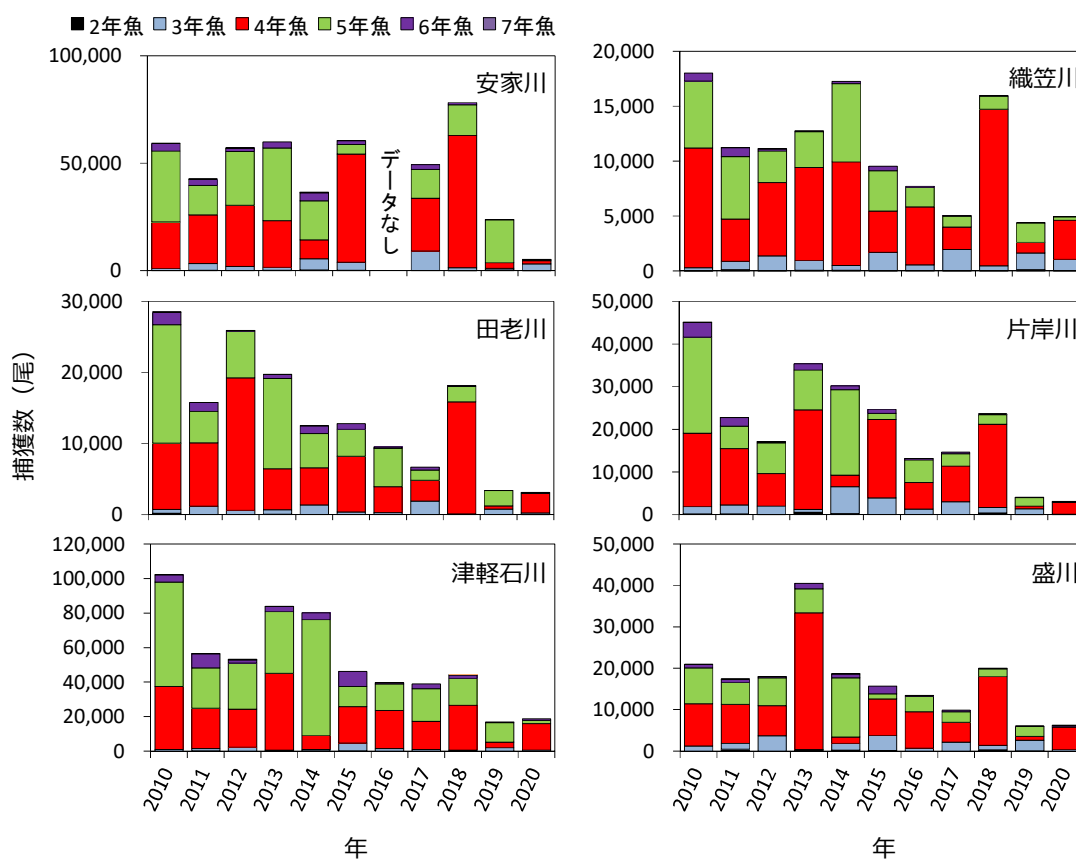


図3 岩手県調査河川の年齢別河川捕獲数（全て1月31日現在までの累計値）

宮城県

2020年の4年魚の捕獲数は、気仙沼大川、旧北上川ともに前年を上回ったものの、気仙沼大川は過去10年間の平均的な値となっている一方、旧北上川では過去10年間で2番目に少なくなっています。3年魚は両河川ともに4番目に少なくなっています。5年魚は、両河川とも過去10年間で最も少なくなっています。その結果、捕獲数全体としては、気仙沼大川で2番目、旧北上川で最も少なくなっています（図4）。

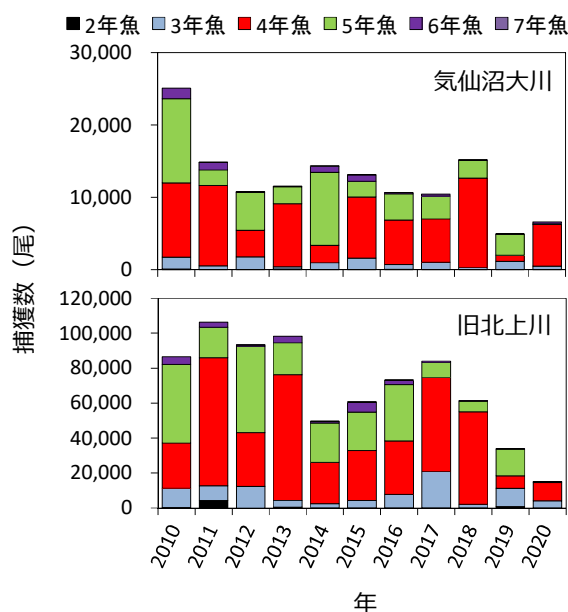


図4 宮城県調査河川の年齢別河川捕獲数（全て1月31日現在までの累計値）

福島県

2020年は3年魚、4年魚、5年魚いずれも過去10年間で最も少なくなっています。その結果、捕獲数全体としては、過去10年間で最も少なくなっています（図5）。

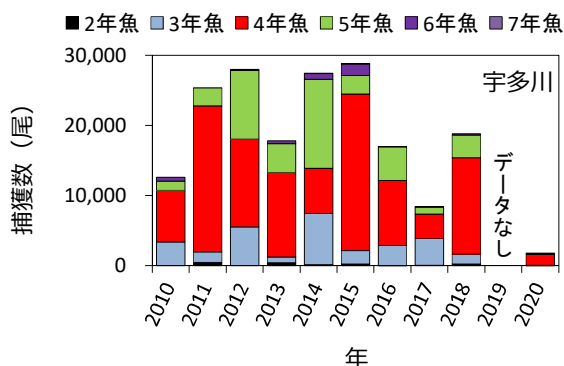


図5 福島県調査川の年齢別河川捕獲数（1月31日現在までの累計値）

3. 年齢別来遊数

上記、12河川の年齢組成情報を基に本州太平洋側における年齢別の来遊数を推定し、2020年の来遊数を過去10年間で比較しました。

主力となる3年魚、4年魚、5年魚はそれぞれ前年同期の49%、270%、7%となっており、5年魚の減少が際立っています。過去10年間では、3年魚及び4年魚は2番目に少なく、5年魚は最も少なくなっています。このように、全ての年齢の来遊数が非常に少ないため、全体の来遊数は最低水準であった前年よりもさらに少なくなっています（図6）。

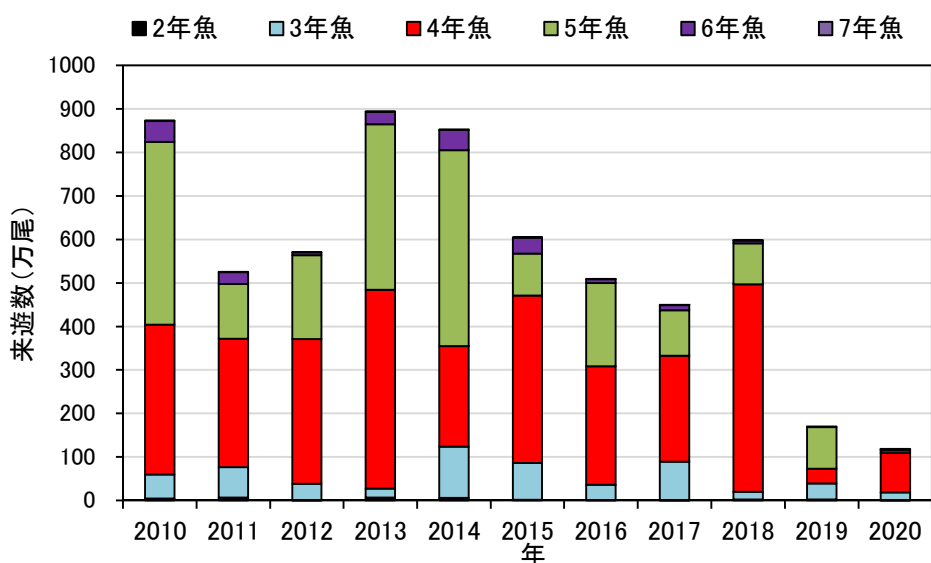


図6 1月31日時点の本州太平洋側におけるサケ年齢別来遊数（累計値）の経年変化